

芥川だより

発行日***2018年12月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集・発行人

下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624



***** 一部200円です *****



ああ、母が逝く

骨と皮だけになった母は、何度も死にたいと身体を丸めてベッドに横たえながら言う。「心配せんでも、必ず死ねる」と私は答えた。どういう訳か老衰しきった母の姿を見ていながら傍観者的な自分がいた。多くを語らず、ただ冷静に母を見ている。

なんとも薄情な息子なのだが、いつまで母は持つだろうか？、今年中か、1ヶ月か、1週間か。どう見ても長くはない。兄に「医者には治療は何もせず、痛み止めだけにしてほしい」と私の希望を伝えた。

母は、この「芥川だより」の良き理解者であった。尋常小学校を出た百姓の婆さんにしては、読解力もあり大学出の知人たちに引けを取らない好奇心とプライドを持っていた。創刊して見せた時も、だれよりも興奮して5千円くれた。それ以後も購読代だと会うごとに5千円もらった。母は、「芥川だより」を何度も読み返しながら「みんな上手にかいとってや、おもしろいわ」と口癖のように言った。私は、最高の親孝行していると自負し貧しい母がなければの財布からくれる5千円は母のプライドだと思い有難く受け取った。

「母に送るラブレターのように書け」と先輩は教えてくれた。母が喜んでハガキをくれるたびに照れ臭い思いと母の上品さを感じとった。農作業に追われながらも新聞を隅まで読み返し日記を書き続けた母は、あっけなく98歳で逝ったが、きっとあの世でも多くの友達に迎えられ「芥川だより」を読み返していることだろう。

母を見ていて、人は学歴ではない、経歴でもない。好奇心とプライドがあれば、それなりの生き方が出来ると知った。「読んでる人から金を取るなよ、わたしがやるから。みみっちい事はするな」と母は、よく言った。ながく無料配布を続けてきたが限界になったから仕方がない。死ぬ前に「学校で4番やった、一番は北村さんで師範に行った。私は4番や」と誇らしげに言った。京丹波町立病院の2階の病室から山を見ているそばで、これまで一度も聞いたことがない母の自慢を聞き、このプライドが母をこれまで支えてきたんだ、と妙な合点をしたのである。

死をめぐるあれやこれ (51)

石川 吾郎

ヴェオリア社と安倍政権は日本を核のゴミ箱にする

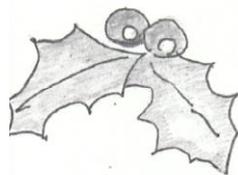
この国会では、国の骨格を変える法案が次々に強行的に採決されています。移民受け入れの入管法に続き、水道民営化も。水道民営化は破綻することが世界中で明らかになっています。しかも水道民営化でもっとも利益を得ると言われる仏ヴェオリア社は、あまり知られていませんが核廃棄物処理の業務も行っていきます。そのヴェオリア社が三・一一で核廃棄物の取り扱い規制を桁違いに緩和した日本に、欧州など放射能規制の厳しい国で出た低レベル核廃棄物を日本に船で輸送して、一般ゴミとして処理をしようと計画しているという、びつくりすることが明らかになっています。

しかもこの計画が「日本で違法にならない」という点にも驚かされます。そもそもわが国の規制が不当に緩和されてしまったことが問題なのですが、これを利用してヴェオリア社は日本を世界の核廃棄物のゴミ箱としようとしているといえるのです。(二〇一六年四月一六日付け日経新聞で報道済み)日本の水道事業を手中にすれば、ヴェオリア社はこの計画を実行してくるでしょう。

悪いことには、今年十二月末に発効するTPPのISD条項などで、日本政府の主権が制限され、これを拒否できなくなる可能性があります。

止めどなくこの国を破壊し続ける安倍政権は国民の生活の敵であることを多くの国民が認識して、これを倒すことが必要です。来る年がその年となるように、次の参院選挙では、この国の形を破壊し続ける自公維新の与党勢力を打ち負かす運動をしていきましょう。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 57	坂本一光	2
哲学命いの時事放談 6	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 20	下村嘉明	5
大人の今昔物語 51	石川吾郎	6
B級サラリーマン渡世譚 65	明石幸次郎	7
オクラの山たより 27	因丁生	8
隠された歴史 2	満田正賢	12
見えない人 2	古城悠	15
編集後記	嘉	17
ふみの道草 2	山椒魚	18
俳句	土田裕 影山武司	18



素老人☆よもだ帳 (57)

坂本 一光

◆みずとはなんじゃ？

地球は水の星である。それゆえ、地上にあるものはすべて互いが互いの一部である。「それゆえ」のそれは水の存在をさす。水は万物を、地上に存在するすべてを、命と命なきものを互いにつなぐ。

命なきものも命も水により

互いが互いの一部となる星

万物を命につなぐ水の星

命は互いが互いの一部

地球に水が存在しなければ、地球における物質循環は現にあるものと全く違ったものになるだろう。地球はそういう星である。

それでは水とは何か。本年五月、行年九十三歳でなくなった児童文学者・かこさとし（加古里子）氏の最後の絵本が先頃発行された。タイトルを『みずとはなんじゃ？』という（かこさとし・作、鈴木まもる・絵、小峰書店、二〇一八年十一月）。水とは何か、子どもだけでなく、大人にとってもそれを考える格好の絵本である。

この本の奥付によれば、氏は東京大学工学部を卒業した化学者であり、民間化学会社研究所に勤務する傍らセルメンント活動や児童文化活動に従事している。定年前に退社した後は児童文化の研究や作家活動を精力的に行い、五百冊を超える児童書

を著した。日本科学読物賞、菊池寛賞、日本化学会特別功労賞など多数の賞を受賞。故郷福井県越前市に「かこさとしふるさと絵本館」がある。「だるまちゃんとしてんぐちゃん」（福音館書店）や「からすのパンやさん」（偕成社）などは世代を超えて子どもたちを引きつけてやまない。

私事であるが、わが家の孫たちは二歳ころから「からすのパンやさん」が作る八十数種類のパンが見開きページに描かれた箇所を開き、素老人に「〇〇ちゃんの好きな△□パンはどれ？」とパンの名まえを言わせ、そのパンを指で押さえてその名前を復唱する遊びを飽きもせず延々と繰り返していた。ものには名前があること、そして、ものとその名前を一致させることには不思議な魅力があるらしい、と素老人は感心したものである。どうやら子どもは言葉を獲得する過程にわくわくしているようだった。

「からすのパンやさん」のもう一つの魅力は、「いずみもり」と名付けられたからすの森にからすたちが現われる幾つもの場面で、数十羽のからすたちの表情が一羽一羽描き分けられていることである。からすの振る舞いは人間と同じで実に面白いのである。

さて、「みずとはなんじゃ？」に氏はどう答えているだろうか。「にんじやのように、やくしやのように、なんどもすがたをかえることが、できるといのが、みずの、だいじな、1ばんめの、せいし

つなのです」と氏は言う（太字は原文のまま、以下同様）。水は、固体、液体、気体と姿を変え、さまざまな場面で生活に密着して存在することを指す。物質が固体・液体・気体の三態を示すことは誰でも知っているが、同じ物質の三態を地上で見ることができるのは水だけである（もちろん水蒸気自体は無色透明で見えない）。水の特異な性質の結果である。なお、三態どころか二態を見ることができ物質も多くはなく、これは固体、それは液体、あれは気体という風に我々は物質を見ている。

次に氏は、「ちきゅうの、いきもののいのちを、たもつための、りょうりにんのような、いしやのような、はたらきが、みずの、すばらしい、2ばんめの、せいしつです」と言う。水はあらゆるものを溶かすことができ、方円の器に従うように流動する。動物が食べた物は消化され血液に乗って体じゅうの必要などころに運ばれる。また水は病原菌から身体を守るリンパ液となって身体をめぐる。さらに、体内で生じた不要な排泄物は尿や汗になって体の外に捨てられる。植物も根から水を吸い上げ、土の中にある養分を水といっしょに取り込み育つ。地球の生き物は水がもつ力で命を保つことができる。

みずとはなんじゃ？「3ばんめは、うみや、かわなどに、たくさんあって、たいようの、ねつで、あつくなるのを、ふせぐ、くーらーや、たいようの、ひかり

がない よるに つめたく こごえないよう ふとんの やくめを するといふ せいしつです」 太陽の光と熱で地上が受けるエネルギーは、晴れた日の平均として、一平米あたり五〇〇ワット以上もある。それでいてなぜ地上の温度は平均一五度前後なのか。水は水蒸気になるときたくさんの熱を地上から奪う。なしる地球の表面の七割は海に覆われている。この水の働きがなければ昼間の地上の温度は一二五度にもなるという。水の蒸発熱が大変に大きいのは水の特異な性質に基づく。では夜はどうか。太陽の熱が届かないと地球は零下一七〇度にもなると考えられている。地球の気には太陽の熱をたくさん蓄えた水蒸気がある。また雲となって浮かび地球を取り囲んでいる。それが布団のような働きをするというわけだ。

以上、水とは何じやと言えは、1番目は、まるで忍者か役者のように水蒸気に変ったり、氷になったりする性質。2番目は、人や動物や植物の体の中にたくさんあって、栄養を運ぶ料理人や、病気を防ぐ医者のような働きをするという性質。3番目は、地球を温かな気候にするクーラーのような、布団のような働きが、水の素晴らしい性質ということである。ありふれた水あればこそ地球という奇跡の星がある。

(水の話は「芥川だより」八十一号以降も参照)

(かたちは心であり、心はかたちになる)

■大分の素老人

哲学叢書の時事放談(6)

「自己責任の哲学」 ～ 自己責任社会が生み出す「格差」「差別」「偏見」

祖藏 哲

1. 「自由」と「責任」

前月号のテーマは新潮45休刊問題に関する「表現の自由」に関しての「自由の哲学」であった。それ以前の記事からも述べているが、現代社会的な「自由」という「概念」は、西欧的近代社会制度を構成する基本概念である。近代社会は確かに「個人の自由の自覚」から出発しているが、この「自由」は「好き勝手」「自由放任」の「自由」で成立しているのではなく、「個人」は「自由の制限」を条件に「共存」できるという「社会契約を結び」「自由を制限した状態の個人」から成り立つのが近代的国民国家での「自由」概念である。さらに重要なのはこの「自由を制限する主体」も他からの強制でなく「自律」でなくてはならないということである。この定義からも分かるように、近代社会の「自由」は「他から抑圧される」ではなく「自ら制限する(自律)」のは必然であることが前提となる。「他から抑制される(他律)の自由」で成り立っていたのは近代以前の「個人」という自覚のない中世的専制国家や帝国、王国である。

ところでこの「自らの自由を制限する」ということに「自己責任」という、これも特に現代的概念の発端もあるように思われる。と言うのは「責任」が問われるのは、その者に「自由」があったかどうか前提

となるからである。「自らが自由」を持っていたからそれを「制限」することができる。つまり「責任」を「引き受ける」ことができるのである。もともと「自由」がない者、例えば「強制された」「自己決定力がない」者はその「責任」を問われることはない。ということは「自己責任」といものは「他人の責任」を問うことではなく、「自らが自由を制限すること」であり、これは「表現の自由」と同じように、他者から規制されるのではなく自分から「社会的共存」のためにその「自由の権利」の行使を自ら制限することであろう。これは前号で述べた内容でもある。

2. 「自己責任」と「自業自得」

さて、その「自己責任」であるが、この言葉が別の意味でまた一人歩きした。内戦下のシリアで、武装勢力に拘束されたジャーナリストが十月末、約三年四か月ぶりに解放されて帰国した。しかし、このジャーナリストに対して日本社会の反応は微妙なものだった。自己責任論が巻き起こったのである。しかし、本来の「自己責任論」の「論」は以前書いたように「自己責任とは何か」を「論議する」ものであるが、これはその議論でなく、「自己責任」を「自業自得」という意味にすり替える「独断的集団いじめ」である。

このジャーナリストの行為の結果を非難する人は「日本政府が危険だから行くな」という警告を無視して危険な国に入り、その結果拘束された。」それは「自己責任」という「自業自得」、だから「政府は救助すべきではなかった」という理屈である。しかし、

不思議なことに救助された本人も、帰国後の記者会見で「自己責任」と「自業自得」を認めている。しかしここに、前段で話した「自らが言う」と「他者が非難する」という事柄に大きな違いがある。本人がいう「自己責任」や「自業自得」というのは「原因」＝「入国手段の自分のミス」による「結果」＝「拘束」に対する責任であり、長期の拘束期間は充分すぎるくらい本人が「責任」を果たしている。一方で非難する側の「自己責任」は「集団責任」と対比される意味の「責任」であり、つまり「我々の集団でない」「日本国の命令に背いた」「自己」の責任という構図である。また、それは「自業自得」と密接に繋がる。「集団の命令」に背いたものはそれ自体が「悪」であり、その悪の報いを受けるのは自分自身がうけねばならないという、「縁起思想」に基づいた根拠のない「偏見」「運命論」である。

さらにこの「自業自得」で論議されねばならないのが、文字どおりその「業」である。「業」とは、仏教用語で行為、所作、意志による心身の活動を意味するものであるが、それは本来「善」も「悪」も含むはずであるが、なぜか日本での解釈は「悪」の場合が多い。日本仏教ではその教説を分かりやすくするために道徳的な説明を利用する傾向にあるから「善」よりも「悪」を避けるための「方便」としてこれを使う必要があったのであろう。「ばちが当たった」である。こういう理由からジャーナリストの行為は「悪」の動機に基づいているから、当然その「罰」は自分に返ってくる。それを助けるのは道理にかなっていないという

論議である。

さてここで「善」「悪」の問題に入らなければならぬ。この場合の「善悪とは」何にとつての善悪なのか。「個人だけにとつての目的達成のため」か「集団にとつての利益のため」か、前者は「共同体、国家」とつては「悪」になる自由であるが、後者は「善」としての「個人の自由の制限」になろう。ジャーナリストの「自由な行為」が共同体にとつての「善」か「悪」かでその行為は判断されねばならない。「世界的脅威になりつつあるという危険な地域」に入つてその状態を知るといふ行為が「ある共同体」とつて「悪」「不利益」であるといふ理屈は現代の世界では通用しない。「自国中心主義」といつてそのような体をとつていふ国があるが、それはただ自分が一番の世界を保持したいという独善主義の一形態に過ぎない。「事実を知る」「実態を知る」ことはその原因を取り除くといふ「方法」を考えられるといふことであり、全人間共同体にとつては「善」である。ある病原菌が危険だからといつてその研究すらも止めてしまふといふことは現代ではありえないのと同じである。「真実、真実を知ることの自由」は社会契約の前提条件である。なぜなら、個人の社会全体に預ける「一般意志」は「真実」「事実」に基づいていなければならぬからである。この意味からジャーナリストの知る行為はたとえ「国家」の政策に反していてもその国家が「自由主義国家」である限り保証されなければならぬ。

それに対する「自己責任論」といふ「自

業自得」論は国家側の支配イデオロギーである。「支配側」にとつて「知られること」が何か不都合を招くからである。そして、一見納得しやすい「自己責任」概念を使つて「自業自得」と個人を「国家」から切り捨てる手法（イデオロギー）を利用することは好都合である。そして、この「自己責任」自業自得」イデオロギーは、こういった、「閉鎖的共同体」固有の「異端者排除論理」を生み、内部においても「格差」「内部差別」を生み出す、「自由」のない近代以前の社会形態と同じである。

「自己責任」自業自得」イデオロギーは日本独特の概念である。自己責任が話題になりだしたのは一九九七年のバブル景気が吹っ飛んで証券会社が倒産したところからである。それらによつて破産する個人が増えてきた、しかし、その責任は誰にも問えない。そこで「自己責任」といふ概念が「恣意的」に使われたのが始まりとされる。しかし、一見ではこれは正しいように思われる。なぜなら「自由主義経済」とはこの理屈で成り立っているからである。そして、この後はさらにこの自由主義は「新自由主義経済」となり「自由」と「自己責任」はセットで加速されるのである。しかし、この「イデオロギー」は「格差」と「差別」「分断」を作り出す原理である。それが現代でもある。

3. 「責任」とはなにか。

日本語の「責任」を辞書を調べてみると、『自分のした事の結果について責めを負うこと。特に、失敗や損失による責めを負うこと。』とある。やはり文字通り、それは責

める、「任せてられている」すなわち「負わされている」という意味から、結果が「悪い」ことだという前提がある。しかし、この責任は外来語の概念の日本語置き換えであり、すべてのこの言葉の本来の概念が伝えられて来ているのではない。これは外来語の翻訳の限界であり宿命である。なぜならば言語の表す概念はその言語を使用する歴史や環境に支配されているからである。具体的に見えるもの例えば「林檎」「りんご」「りんご」「Apple」であれば実物はどこにいても同じであるから言葉とそのものは同じである。しかし「せきにん」というものは目にみえない。それを他国の言語に置き換えるのは不可能である。「走る」とか「歩く」は同じく目に見えないがどこにいても再現可能である。

さて、西欧での「責任」の対概念は「Responsibility」である。これは何かに対して「応答」すること、その状態を表しており、自己の引き起こした結果に関して対応する義務があるといふことのみである。この意味なかに結果の「悪」は前提されていない。結果に関して自分が関係しているといふことを認めることだけである。この概念の責任は「法的責任」が基本になつていふと思われる。つまり、「自由の権利」を持つ個人が、他者、社会に対して「その利益を害する」結果を与えた場合その行為が「原因」と関係するかどうかを認めるにかである。このように本来の「責任」は前提として「他者」を含む「社会」にとつての利益に関係するのかどうかを問ふことと関係しているのである。「命令」「忠告」に

背いたという意味は「法文に書かれている範囲」でのみ有効なのである。現在の日本国でのどの法律でも「政府の指定する危険な地域に非合法で入ったものは罰せられる」という条文はない。しかし、このところが微妙なのであるが、もし国内でのことでも、何か社会に害を与える企てをしている者がいるとして、その私有地に無許可で入つてその事実を知るとは許されるのかということが起こる。しかし、この場合はその企ての「確証度合い」によるであろう。

この度の「シリアの状況」は国際的な観点でみて「悪の企て」である。これを「自業自得」と攻め立てている人々はこの想像力が欠けているし、さらにこの論理が支配イデオロギーに加担しているという想像力も欠けている。

4. 自己決定という幻想

さて、この「自己責任」といふのは「自業自得」として「他者の自己」を責めるにせよしそうでないにせよ、その「行為」が自己の決定によつて行われたをいふことを前提としている。つまり、様々な選択可能な状況の中で自分の意思でその選択を選び、決定したといふことである。ここで問題はあるとして「自分だけ」の意思で選択が「決定」できるのかといふことである。もちろん、その決定が「他からの全面強制」は論外であろうが、私たちが社会で生活している以上、一切外部の影響を受けないといふことはありえない。これは誰でもが認める事実であろう。しかし、ここからが問題である。その問題とは「個人の置かれている状況」である。この個人の状況は次のよう

大峯奥駈道(20)

下村 嘉明

に分類される。つまり「他からの影響」を、
1「受け取る能力がない」、2「受け取りを妨げられている」、3「受け取る意思のない」場合である。先程の「自己責任」自業自得」イデオロギーは3のケースであろう。1「責任能力の欠如」の場合は法律でもその責任は問えない。2「情報非開示、秘密主義情報操作」の場合は専制独裁国家とその類似国家の場合である。

このように私たちが個人の自由を基本として社会を成り立たせるためにはこの「自己決定」に対して、常に「開かれた真実の伝達可能な保証」が前提となる。「知る権利」と「知らせる義務」である。その双方が平等に利益をもたらすということがなければこのような社会は持続しない。バブル期にあったのが果たして、投資のリスクが十分説明されていたか、そして「自己責任論」がそれを予測できた企業の責任逃れの論理になっていないかどうか、私たちはよく見極めなければならぬ。

「自己決定論」は「弱者を切り捨て論理」であり、「社会的責任追及、議論を「回避」する「独断的決定論」である。「自由主義国家」や「民主主義国家」は開かれた情報に基づく「議論」を通じての「合意」のもとに成り立つ、「そのことが保証された個人」の集合体である。「自己責任」はそれが問えるという「自由の確認」に使われ、また、全体責任ではなく、自分行為の「範囲だけの責任限定」として使われるのは有効であるが、それらを逸脱し、「全体」の責任を議論なく「自己」として個人に押し付けるのは決して全体の利益にはならない。

誰もいない太古の辻から釈迦ヶ岳を目指して歩き出すとすぐに大目岳の登りになった。結構急なところがあつて疲労が溜まる。コースタイムで見ると、四〇分ばかりなのだ。私には遠く感じられた。

前鬼から太古の辻の登りを頑張つて早く歩いた為か足が重い。同行する二人に対する変な対抗意識もあつてか、少しピッチが速かったのだ。

私には、余裕がある時にはゆっくり歩くが疲れてくると早く歩く癖がある。特に誰かと歩く時には、その癖が出やすいのである。あまり言いたくないのだが、私の心には嫌らしい悪魔が住んでいて悪さをやる。

幾人かで登る時には、誰かがバテてくれれば助かるという思いがある。誰かに悪者になつてもらい自分だけは楽をしたいという魂胆である。見え透いた思いなのだが、この思ひは多少なりともみんな持っている。

自分より他の者が絶対的に強い者たちと一緒に登るのは非常にづらい。出来れば避けたいから、同行者の技量や体力が気になるのである。今回初めて同行する二人についても同様で、彼らの体力や登り方が気になった。どんな考え方をし、どんな癖を持っているのか。

今回は、リーダーを決めていないから、余計に気になったのである。リーダーのいないパーティーは危険である。各々が自己責任で登るにしても、同一行動をとる場合、どうしてもリーダー判断が必要な時があるからだ。

今回は、親しい熊さんと二人で気楽に登る予定だったから、リーダーの事は考えてはいなかったのだが、急に熊さんが不参加になり、代わりによく知らない二人と行くことになったから、リーダーを決めるべきだった。よく知らないからこそ、リーダーを決めるべきだったのだ。

しかし、そこまで考えが及ばなかった。一旦、登山が始まればイケイケどんどんになる。登つて下りてビール飲んで帰るという極めて単純な思考になる。難しいことは後回しというやつだが、うまくいっている時は、いいのだが、問題が起きれば内輪もめになる。必ずなる。リーダーという悪役がどうしても必要な理由がここにある。

我々は何事につけて良い人と見られたい、悪人には見られたくない。しかし、そうはうまく立ち回れない。これが世の常だ。どうしても、非情な判断をしなければならぬ時がある。この嫌な役を引き受けなければならぬのがリーダーである。

リーダーになれば、その責任が問われる。その時々判断を求められ決断しなければならぬ。たとえ間違つていても決断しなければ前に進まない。非常にづらいのがリーダーである。誰も好んでリーダーになりたがる者はいない。たまたま例外の者もいるがリーダーとは、そういうものである。

山の遭難は、突き詰めて考えれば人為的な事故である。確かに防ぎようのない自然現象もあるが、遭難事故の大半は人為的なものだ。冷静な判断を出来ずに起こす事故がほとんどだ。よくよく考えていけば、つまらぬ事で心を動かされ事故につながっていることが

多い。事故にならなくても危ない目にあつた。山登りとは、一見肉体的な運動のように見えるが、実は精神的なドラマを自作自演しているようなものである。日常から離れ非日常的な自然の中に身を置いて、やはり日常的な物事が付きまとい悩まされるのだ。そのうえ、同行者がいれば、全く頭の中は日常のものになつてしまふ。このことが単独行が好まれる理由の一つだと私は思ふ。

大目岳のガレ場を登り、鎖場を何とか過ぎたあたりから、息も足もへとへとになつてきた。とてもじゃないけど弥山までは行けそうにない。同行の二人は、なかなか元気で私ほど疲れてはいないように見える。

私は、歩きながら自問した。どうしてなのか？どうしてもっと早く歩けないのか？少なくともこの程度の山なら軽快に歩けるはずだと思つていたからだ。何が悪かつたのか？荷物も軽いし天気も良く何が足りなかつたのか？思いをめぐらした。

そして、昨夜からの事を思い出した。大坂を車で夕方六時ころに出て、九時過ぎに吉野に着いた。今朝は三時ころに起きたし車で移動した。何が悪かつたんだらう？

考えあぐねて、ハタと気づいた。車の冷房ではないだろうか。夏の暑さで車の冷房を強くし足腰を長時間冷やし睡眠も少なく身体を疲労させていたんだ。若い時なら問題なく超えられたかもしれないが、今の自分の体力では無理だったのだ。入山する前は、余裕をもって体力を温存しなければいけなかつたのだと考へ着いた。

さあ困つた、これからどうしたらいいのか。

大人の今昔物語 (51)

石川 吾郎

今回の舞台はインド。国王の宝玉を盗んだことよって出世をとげた者の話し。善と悪に根源的な区別はないとする、哲学的な内容にまでいたる説話です。教科書に出ない度は二／五。

国王、盗人のために夜光の玉を盗まれる話し (巻第五 第三)

今は昔、天竺(インド)に一つの国があった。その国の国王、世界に二つとない宝物である夜光の玉を所有していた。

宝物藏に収められていたが、ある盗人などのようにしてか、盗み出した。

国王はこれを嘆き「もしや、あれが盗んだのではあるまいな」と、ある人に嫌疑をかけたが、ただただ問いつめるだけでは白状するわけもないので、これに泥を吐かせるために一計を思いついた。まず高樓を七種の宝物(七宝)で飾り、玉の幡を掛け、床には錦を敷き、この上なく莊重に飾り、見目麗しい女たちに華麗な衣服と装飾とを身にまとわせ、琴や琵琶などの靈妙な音楽を奏でさせ、さまざまな娯樂を集め、この夜光の玉を盗んだ犯人とおぼしい者を召し出して、痛飲させ、酔い倒れるほど泥酔させた。

その後その者を密かに担ぎ出して、例の飾り立てた高樓の上に運んで、そこに寝かせた。またその者にも美麗な衣服を着せ、

花飾りのレイや瓔珞を掛けさせた。このようにされても、本人はすっかり酔い果てて、つゆ気づくこともなかった。

しばらく後、酔いが徐々に醒めて、起きあがり周囲を眺めると、そこはこの世と思えないほどの豪華で壯麗な場所であった。見渡すと四隅には白檀や沈香の極上の香が焚かれ、その香りは靈妙で、この上なく芳ばしい。玉の幡を掛け、美麗な錦が天井に張られ、床に敷かれている。極上に装われた女たちが、髪上げをして、きらびやかな装束で居並び、琴や琵琶などを弾き、靈妙な樂を奏で遊んでいる。

これを見て男、「自分はどんなところに来てしまったのだ」と困惑して、傍らの女に「ここは何処だ」と尋ねる。女、答えて「ここは天国でございます」男「自分が天国に生まれたわけはない」。女「あなたさまは、嘘偽りをなさりませぬので天国にお生まれになられたのです」。

このように王が企んだのは、「お前は盗みをしたことがあるか」と、問いつめようとしたからである。「嘘偽りをしない者は天国に生まれる」と、男に言い聞かせれば嘘はつくまい。さらにこの国の王の宝物である玉を盗んだのではあるまいな、と問いつめれば白状するだろう。それを何処に隠したのかとさらに問えば、これも白状するだろう。その場所に人を遣って宝玉を取り戻す、という企みであった。

さて、女の「嘘偽りをせぬ者が生まれるのが天国」であると言うのを聞いて、

玉の盗人が頷く。女「盗みをされたのですか」との問いかけに対して、盗人はその答えを言わず、そこに居並ぶ女たちの一人一人を見渡していく。全てを見渡すと、首を引つ込めて黙ってしまった。以後幾度も問いかけるが、一向に答えることをしない。

女は問いに窮して「このようにも、沈黙して語らぬ者は、天国には生まれませぬ」と言い、高樓から追い下ろした。

国王は計略が失敗して困惑して、次に思いついたのが、「この盗人を大臣にしてやろう。自分と一つ心で分け隔てないようにしてやろう」と、この者を大臣に取り立てた。

その後国王は、些細なことも、大事も小事もすべてこの者に相談をした。限りなく親しくなり、互いに隠し事は全くないほどになった。

その後、国王がこの大臣に言うに「わしは内心に思うことがある。先ごろ並びなき宝玉を盗まれた。これを取り戻したいと思うのだが、そのすべもない。もしその盗人を探し出して取り戻せるならば、この国の半分を分けて治めさせようと思うので、その勅令を發布せよ」と。

この大臣が内心思うに「宝玉を盗んだのは自分に他ならない。しかるに国の半分を治めさせるというのならば、宝玉を隠し続けるのは無意味だ。今、申し出て国の半分を譲り受けよう」と考えて、国王ににじりより、国王に申し出る。「この

宝玉を盗んで隠し持っているのは、この私であります。国の半分を分けていただきます」

このとき、国王は非常に喜んで、国の半分を統治させるべき勅令をだした。大臣は宝玉を取りだして、国王にお返し申した。

国王「この玉を取り戻すことは、限りない喜びである。年来の悲願であった。それが今、叶った。大臣よ、末永く国の半分を統治せよ。そもそも、先年に高樓を作つてそちを昇らせた時、言うことなく、首を引つ込めていたのは、何の訳だ」と詰問する。

大臣「先年、かの宝玉を盗もうと僧坊に足を踏み入れましたが、比丘が、経を徹夜で読経しておりましたので、寝静まるまで待とうと壁際に立つて聞いておりましたが、比丘が経を読むさまは、『天人は瞬きをせず、人間は瞬きをする』というのを聞きましたので、ここに居並ぶ女たちは、皆瞬きをしておりましたので、天人ではないなと思ひ、何も申し上げずに終わったのでした。もし盗みをしておらなければ、このときに騙されて辛い目にあつていたことでしょう。今こうして大臣となり、また半国の王にもなつておりませんでしよう。これはひとえに盗みの徳であると。」「これは経の説くところだと言われている。このようなわけなので、悪いことと善いことには、区別はない同じものである。

悟らぬ者たちが善悪をことさらに言い立てるのだ。

あの央嶮魔羅は、仏の指を切らなければ、たちまちに悟りを開くことができなかっただろうし、阿闍世王は、父を殺さなければ生死輪廻の苦を脱却することはできなかっただろう。この盗人は宝玉を盗んでいなければ、大臣の位に昇ることはなかっただろう。このことをもって善と悪とは別のものではなく一つのものである、と知るべきであると伝えられているとか。

《コメント》

今回の舞台はインド。宝玉の盗人が、それゆえに出世をしていくという現代の常識では考えられない、意外な展開がほとんど重なるって話です。我々にはちょっと解釈しにくい内容です。その上、最後に突然話しは「善と悪に区別はない」「善悪一如」という、哲学的な高みにまで達してしまふ、という壮大さです。央嶮魔羅は、殺人を繰り返す凶悪な盗賊でしたが、釈迦に受け入れられ出家をするという者。阿闍世王は、父王殺しを犯しています。

しかし我々もよく考えてみると、果たしてこの「善と悪」が截然と区別できるものか、については大いに疑問が湧いてくるところです。ニーチェの「善悪の彼岸」というテーマや、「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という、親鸞の「悪人正機」説を思い起こします。

B級サラリーマン渡世譚 (65)

明石 幸次郎

担当者の役割 (その18)

店も、やっつて姉妹も年季が入ってる、ボンベイ」と言う喫茶店で、濃いコーヒーを飲みながら、サラリーマンとは、如何にあるべきかの自説をたっぷりとK村から聞かされた。

自席に戻ると定刻の十二時四十五分を回り、十三時になっていたので、明石は席に座る前に、仕事をしている周りのA杉課長、M居、T村、その他の人に「遅くなり、すみません！」と頭を下げてから座った。

K村、N川、K久保は、定刻の十五分を回ったことには、臆面もなく、黙って座った。明石の横に居るM居は、行き成りN川に向かって「おい、遅いぞ！N川、A杉さんのパングラの出張の予定と今日現在の会社の動きをM商事に聞いて、俺に報告してくれよ！」ときつく言った後、明石の方に向かって「明石！例のK田部長への韓国との交渉のレポート、夕方、何時ごろ出来るんや！」と陰のある言い方で問うてきた。

N川の後は自分に来るなあと予想していたので「ストーリーは大体は考えています。韓国側とM商事への私の出張予定、目的は、昼前に連絡済です。後は、宇都宮工場からの納期短縮の返事待ちです。まあ、三時頃には、電話が無かったら、こちらから電話して、結論を出すようにします。それに参考にかけて頂きたいのですが、N居さん

は、五パーセントUPまでは感觸として、OKと言われてましたが、更にUPするには、どう言う理屈付けなり、方策があるか、お考えがありますか？」と直球で投げ返すと「俺がやった時期と状況が変わって来て、お前に担当が代わったので、それを考え、実践するのが担当者としての君の仕事やで！」とベースに届かない様な変化球を投げ返して来た。

輸出部の生え抜きのエリートと言われていた五年先輩がこんな返答を、転動したばかりの後輩に発するかと思うと、この人の人間性と実力に、早くも失望の念が湧くと共に、「昼休みの時間は守れよ」と言って二人に注意したら、その場合は済むことなのにと、M居の言い方に腹が立つてきた。

明石は、その心情とは裏腹に落ち着いて「分かりました。集中して纏めてみます。情報として、本社資材部の元上司が、最近調達で、韓国に行かれたようですので、あちらの物価上昇など経済状況を聞いて、一〇パーセント値上げの参考にしたいと思えます。今から聞きに行ってきます」と気分転換の為と何らかの生の情報を得る為に、直ぐに席を立った。

エレベーターを待つ間、M居の先程の対応を考えた。きつと、一年後輩のK村の自由奔放の行動と発言に日頃から反感を感じていて、又、実力とその行動力を妬んでいるような気がした。そのK村が自分の部下の明石とN川を誘い、十一時半から一時まで外食するなど、けしからん行為だとK村

に腹を立て、自分とN川にあの様な回りくどい嫌味な対応に出たのだと想像した。明石は転動してまだ、一週間も経たないのであるが、何となく輸出第二課の課長以下の八名の男子社員と二名の女子社員の夫々の人間関係が分かってきた。

本館の一階にある資材部に入って行くと、先日転勤の挨拶に来たばかりではあるが、また居心地の良い実家に戻ってきた様な気分になった。

実家の長兄の様な存在の元上司がいる席に近づいていくと、女子社員が明石に気がつき、折りたたみの椅子を持ってきてくれて、元上司の横に「どうぞ」と言って座らせてくれた。

「どうや！輸出部は慣れたか？中国、韓国、東南アジア担当と言っていたが、これからの市場やなあ？先日も言ったが、先進国よりは、遣り甲斐があり、明石君に向いていると思うがなあ？」と訪ねて来た用件は問わず、笑顔で話し掛けられた。「それがですね、今週末曜から韓国に出張する事になりました。課長が先月に調達調査であちらに行かれた事を聞きましたので、向こうの物価、経済状況など生の情報を教えて頂き、参考にさせて頂こうと思ひまして」と用件を伝えると、「そうか！へー、もう韓国へ出張か？明石君、期待されてるんや？それにしても、エライ急なことやなあ」と言われ「まあ、訳ありでして、先発ピッチャーが降板してしまい、ベンチに私しかいなかったんで、急遽リリーフでマウンドに登るこ

オクラの山たより (27)

困子生

「君を抑えに、投げて来いとマウンドに上がらせる監督も面白い人やなあ〜何と言う部長や?」と聞かれたので「ヤクザの親分みたいな感じの人で、K田さんと言います。

輸出本部第二部長で、外部からは輸出第一部はK田軍団と呼ばれます」と言いかけた時に肩をポンと後ろから叩かれた。

振り向くと明石と交代で堺工場購買部から来たT本であった。ニコニコ笑いながら

「又、どないしたんや。エライ真剣にM田さんと話をしているやないの?」とズボンに手を入れて話しかけて来た。M田課長はT本に「輸出部のK田部長という人、知ってるか?」と問いかけた。T本は自席に座りながら「あの、メガネ掛けた、恐そうな人かなあ?」と明石に聞いた。

「そうです」と答えると「ああ、あの人は、堺工場の検査課に居て、厳格な検査員として、製造部門とよく喧嘩していたようで、当時の工場長から、ブラジルの工場に出された人だと先輩から聞いたことがあるわ。筋を通す人で弁が立ち、皆から恐がられていた人らしい。まあ、検査課には、優し人ばかり置いていたら不良品でも何でも、通してしまい兼ねないわ。ブラジルから戻り、副社長の信任が厚く、欧米以外の市場を開拓せよという事で第二部長になったと、これは、知り合いの国内営業の人から聞いた。明石君はその恐い人の下に居るの? 鍛えられて良いのと違うか」と感想を述べた。

五

先回は天津皇子の事件と皇子の和歌についてあれこれと述べました。今回は皇子の「懐風藻」にのせられた「臨終詩」についてのあれこれがテーマとなります。

もう一度、天津皇子の「臨終詩」を示しますと次のとおりです。原詩の後にあるのは書き下し文、()は現代語訳です。

金鳥臨西舎 金鳥西舎に臨らひ

鼓声催短命 鼓声短命を催す

泉路無賓主 泉路に賓主なし

此夕誰家向 此の夕べ誰が家に向かはん

(太陽は西のやかたに傾き、夕刻を告げる太鼓の音はわが短い命をせきたてる。黄泉に行く道には迎えてくれる主人も

いない。この夕べ、私はいつたどこに宿るといふのだ)

実をいうと、この「臨終詩」も「辞世歌」と同じく多くの研究者から天津皇子の実作ではないとされています。なぜか。そして、どこから出てきたものか。気になりませんか。今回の内容はその辺りのことを中心にあれこれと書くこととします。

六

いうまでもありませんが、身に覚えのない罪で、または何らかの罪を犯したために刑場の露と消えた人物は星の数ほど

いるでしょう。しかし、死ぬ間際に「臨終詩」や「臨刑詩」を、それも後世に残るような漢詩を書いた人物、しかも天津皇子の死よりも以前でとなると、それにあてはまる人物はそう多くはありません。まず、そういった人物の漢詩をいくつか紹介して天津皇子のそれと比較してみることになります。それによって皇子の詩の特殊性が見えてくるはずですから。

天津皇子以前、つまり七世紀以前の漢詩となると漢詩の本場である中国では「六朝の時代」の詩ということになります。

「六朝」というのは、中国史の上では三世紀から六世紀までの四百年にわたる時期を指しています。「六朝」というのはもともと健康(現在の南京のこと)に都を置いた六つの王朝という意味で、「三国志」

に出てくる呉に始まり、東晋を経て南朝の宋・齊・梁・陳までの中国南方の六王朝をいいますが、また三国の魏のあと西晋から北朝(北魏・北齊・北周)を経て隋にいたる北方の六王朝を含めて広く

「六朝」の名で呼んでもいます。別の名称でいえば「魏晋南北朝」とほぼ同じ時期を指しています。中国を統一して支配した漢の時代四〇〇年と唐の時代三〇〇年の間にはさまれて短命な王朝が次々と生まれては消えた時代、単純化して言えば分裂と混乱の時代でした。

分裂と混乱の時代といえれば簡単ですが、要するに強力な支配機構が存在せず社会の秩序も何かと不安定な状態でした。そ

のため権力の基盤は弱くひっきりなしに支配者が交替してしましたから、その社会に生きる人々も常に生命の危険にさらされるかもしれない不安と恐怖をもって生きていた時代でした。

そうした時代であるがゆえに多くの、しかも第一級の詩人たちが、その家族もろともに刑場の露と消えていきました。そうした詩人たちが「臨終詩」「臨刑詩」を残していったのです。

まず取り上げるのは南朝宋の人で山水詩人として名高い謝靈運(三八五〜四三三)です。彼は「池塘 春草の夢 園柳 鳴禽変す(池の堤には春の草が生え初め、庭園の柳に鳴く鳥も次々に種類が変わっていく)」という名句で知られています。

彼の出自は江南きつての名門貴族の謝氏。さらには祖父の謝玄は稀世の名将とされた晋の車騎將軍でありました。生まれるながらの貴公子、かつ才知あふれて聡明な人、それが謝靈運です。

しかし、彼は江南随一の美文の書き手だという高い世評を得る一方で短気なために礼節を踏み外すことも少なくありませんでした。何度も出仕と引退を繰り返し結局は時の王朝と相いれず謀反の嫌疑で棄死に処せられてしまったのです。

謝靈運が死にのぞんで作った詩が正史の「宋史」にあります。詩の最初の四句では、彼はいずれも忠義のために死んだ歴史上の臣を引いており自らの死をそれになぞらえています。その後の部分で自

分の心情を次のように述べています。

凄凄凌霜葉 凄凄たり霜をしのぐ葉
網網衝風菌 網網たり風を衝く菌

邂逅竟幾何 邂逅はついにいくばくぞ

修短非所愍 修短はかなしむ所にあらず

送心自覚前 心を自覚の前に送る

斯痛久已忍 この痛み久しくすでに忍ぶ

恨我君子志 恨むらくは我が君子の志もて

不獲巖上泫 巖の上にはほろごをさざりしを

(寒々として霜をしのいでいる葉、弱々

しく風に向かう短命なキノコ。出会いは

結局いかほどであったか。命の短いのを

恨みはしない。今や仏のもとに私の心を

送ろう。俗世の苦しみも長く耐えたもの

だ。ただ私に君子のこころざしがあつた

のに、隠者のように岩の上で死を迎えら

れなかったのが恨めしい)

この部分で謝霊雲は自分の理不尽な死

をなんとか受け入れようとしつつも、こ

の世に対する未練の思いを吐露していま

す。突然、生命を断ち切られる人間とし

て当然の思いであつたでしょう。仏教に

強くひかれ光に満ちた浄土の世界と重なる

ような山水表現を多く残した謝霊運で

あつても心穏やかに死を迎えることはで

きなかつたということでしょうか。

次にあげるのは「臨終詩」という題名

で唯一「文選」に収められた詩です。作

者は晋の歐陽建(？～三〇〇)、字は堅

石の「臨終詩」です。

彼は晋の滅亡のきつかけをつくつた皇

族同士の内乱である八王の乱に巻き込ま

れ、伯父の石崇、自分の母、そして妻子

ともども斬刑に処せられました。三十四

行に及ぶ「臨終詩」では自分が刑死に至

るまでの人生をあれこれと振り返りさら

には恨み言も述べつつ最後に次のように

言っています。

上負慈母恩 上は慈母の恩にそむき

痛酷摧心肝 痛酷して心肝をくだく

下顧所憐女 下は憐れむ所の女をおも

側側中心酸 側側として中心にいたむ

二子棄若遺 二子も棄てて遺るがごとし

念皆遭凶残 おもつにみな凶残にあわん

不惜一身死 一身の死を惜しまざるも

惟此如循環 此れをおもえば循環するが如し

執紙五情塞 紙をとれば五情ふさがり

揮筆涕汎瀾 筆をふるえばなみだ汎瀾たり

(上は慈母の恩にそむき、その痛みには

胸も張り裂ける。下はいとしい娘のこと

を思い、きりきりと心の中が痛む。二人

の息子もむごくも見捨てることとなり、

みな残酷な目に遭うことが頭を離れな

い。我が身一つの死は惜しまずとも、母

や妻子が殺されると思うと頭は堂々め

ぐりだ。紙を手にしても胸はふさがり、

筆を走らせても涙がとどめなく落ちる)

歐陽建は自分だけでなく罪もなく殺され

ていく母と妻子への激情をほとばしり出

させています。権力者によって一方的に

自分や妻子、そして母までもが死にお

やられていく者の思いとして十分に納得

できるものでしょう。

七

さて、大津皇子が生きていた以前に書

かれた二人の「臨終詩」を見てきました。

いずれも刑死を目前にしたギリギリに追

いつめられた状況の中で書かれた詩です。

死を目前にした詩人は不安と恐れから逃

れようと思考を重ね、そして、その思考

を何度も循環させます。いったんは諦念

という境地に達しても肉親までもが残酷

に殺されるということをおもえば思考は何

度も堂々めぐりを繰り返します。こうし

た解決できぬまま繰り返される懊悩を迷

いのままに吐露するのが六朝時代の「臨

終詩」のパターンといえるものでした。

しかし、その一方で大津皇子の「臨終

詩」を見ると死を目前とした懊悩といえ

るものが見られず淡泊という感じすらし

ます。詩に書かれているのは処刑が近づ

くのをしらせる鐘の音の非情さと地下に

ある黄泉の国へと旅立つ不安・恐怖とい

つたことです。不条理な死を無理やりに

迎えさせられること、家族のことなど

堂々めぐりを繰り返す苦悶のさまはまっ

たく見えません。

五言絶句という短い詩のせいでしょう

か。捕えられて翌日に死刑となるという

急な動きの中で処刑のときを迎えたから

でしょうか。その理由は分かりませんが、

六朝の詩人たちとはまったく異質な「臨

終詩」を皇子が書いているのは確かです。

こうしたことから以前から皇子の「臨終

詩」は仮託詩ではないかという説がずつ

と言われ続けてきました。そして、近年、

皇子のとされる詩が仮託詩であるのは間

違いないということが強く主張されるよ

うになってきたのです。

実をいうと皇子の詩と瓜二つといってい

いほどそっくりな作品が存在するのです。

その大津皇子の「臨終詩」に似ている

という詩は隋に滅ぼされた陳の最後の皇

帝である陳叔宝(陳後主ともいう 五五

三二六〇四)の作品とされる詩です。

鼓声催命短 鼓声は命の短きを催し

日光向西斜 日光は西に向かひて斜めなり

黄泉無客主 黄泉に客主なし

今夜向誰家 今夜誰の家に向かわん

(夕刻を告げる太鼓の音は自分の短い

命をさらにせきたてるように聞こえ、日

の光も西に向かつて傾いている。黄泉の

路には客をもてなす主人もいない。今夜

は誰の家に向かわんか。)

陳の滅亡は五八九年のこと。滅亡の時、

すぐに陳叔宝は処刑されたわけではない

ので、この詩は「臨刑(臨終)詩」では

なく「臨行詩」(処刑場などに連行される

ときに作られた詩のこと)と題されてい

ます。あえて言えば亡国の君主としてこ

れから来るであろう死を覚悟した詩だと

いえるでしょうか。

この詩の作者である陳叔宝は多芸多才

でしたが、酒色に溺れ国事を顧みること

なく国をついには滅亡へと導いたといわ

れる皇帝です。

隋の軍隊が宮城の中に攻め入ってくる

や寵妃とともに愛姫二人とともに井戸に飛び込んだものの生きながら捕えられ、隋の都長安へと送られて十六年の虜囚生活を送りました。隋から送られた諡号は不徳の人を表す「煬」です。彼の作品の中では

妖姫臉似花含露

妖姫 臉は花に似て露を含みて

玉樹流光照後庭

玉樹 流光 後庭を照らす

(艶っぽい女たちの容貌は花に似て露を含んだようで、月の光は美しい木立を通して後宮の裏庭を照らしている。)

という寵妃の容色を讃えた「玉樹後庭歌」という詩が有名です。この詩は唐の詩人杜牧が

商女不知亡國恨

商女は知らず亡国の恨み

隔江猶唱後庭歌

江を隔てて猶う後庭歌

(酒と色香を売る遊女たちには亡国の恨みなどは分かるはずもない。江を隔てた向うでは、今もなお、あの「玉樹後庭歌」が歌われているではないか)

と「秦淮に泊す」にうたってさらに多くの人々に知られるようになりました。と同時に陳叔宝が遊興にふけて国を滅亡させた無能な皇帝だというイメージもすっかりと定着しました。

それはさておき陳叔宝の「臨行詩」に話をもどしますと今に伝わる彼の詩はおよそ九十首。その中に「臨行詩」はどこにも見あたりません。

では、この「臨行詩」はいったいどこから見だされてきたのでしょうか。驚

くべきことに陳叔宝の「臨行詩」は中国には存在せず、日本にしかない文献の中からそれが見つかりました。

タネあかしをすれば隋の時代に著わされた「維摩経」の研究書「浄名玄論」を奈良元興寺の僧である智光が解説した「浄名玄論略述」の中に「臨行詩」は書かれているのです。

「浄名玄論略述」が書かれたのは七五〇年頃のこと。詳しい考証はやめますが、先ほど述べたように陳叔宝の「臨行詩」に関する記述は中国に現存する文献にはまったく見えません。

中国の文献に見当たらないからといって長安に連行されていく途中で陳叔宝が「臨行詩」を作ったというエピソードが日本で作られたのではなさそうです。どうやら当時の江南地方の民間伝承がそのまま我が国に伝えられたらしいのです。

つまり、遣唐使とともに唐に渡った留学僧の多くが向かったのは中国の浙江省にある天台山。その近辺の民間伝承を留学僧らが日本に伝えた可能性が強いという事です。

南朝最後の皇帝である陳叔宝に対して江南の人々がどのような感情を抱いてかはわかりません。

しかし、陳叔宝を悲劇の主人公であるかのように思い、その心を推測して「臨行詩」を江南の民衆の誰かがつくりそれが広く人々の間で歌われるようになったのかもしれない。

そして、ひよっとしたらですが、江南の地におもむいた日本からの留学僧たちが街中で歌われているその詩をたまたま耳にして日本に持ち帰り書き残したのかもしれない。

そして、さらには「浄名玄論略述」の中にある「臨行詩」を目にした誰かが、その詩をほぼそのまま使って大津皇子になりかわり「臨終詩」を作ったのではないのでしょうか。奇しくも「懐風藻」「浄名玄論略述」の成立は七五〇年頃のことです。

以上は筆者が心の中で思い描いている大津皇子「臨終詩」成立のドラマです。大津皇子の詩をもう少し具体的にみてみましょう。

大津皇子と陳叔宝の詩を比べると第一句と第二句の順序を入れ替えていること。そして「客主」を「賓主」に変え、「向誰家」を「誰家向」と語順を変えていることがわかります。

細かいことを言えば、当時の用例からしますと「客主」とは「客をもてなす主人」のことですが、「賓主」とは「客人と主人」のことであって「賓主なし」では「訪れる客」も「それを迎える主人」も「いない」となって何を言っているのかまったくわからないことになってしまいます。

また陳叔宝の詩の「向誰家」を「誰家向」と語順を変えています。これは中国語の語法からは正しくありません。「誰

の家に向かうか」という日本語の語順に引きずられたのでしょうか。そのため日本風の漢詩となって、本家である中国の漢詩としては読めない、意味の通らない詩となっています。この辺りから「臨行詩」を持ち帰った唐の留学僧が皇子の「臨終詩」を作ったのではなく、中国語・漢詩に習熟していない人物が「臨行詩」を参考にして皇子の「臨終詩」を作ったのではないかという想像が出てきます。ただし、可能性は低いのですが、わざと和風にしたとも考えられますので、あくまでも筆者の想像です。

八

ここまで来ると次に大津皇子以後の「臨終詩」は何らかの影響を後世に与えたか、が問題になります。実をいうと皇子の「臨終詩」のような漢詩の作例はその後日本の漢詩には筆者の見限りありません。平安時代、漢詩文の栄えた時代が一時期ありましたが平安時代の漢詩集には見当たりません。

時代が下って中世においても漢詩の世界の中心にいたといえる五山の僧侶たちの作品に「臨終詩」といえる詩はありません。あったとしても死を覚悟した高僧が弟子たちに自らの教えを示した「偈」のような詩がほとんどです。

しかし、近世になると「絶命詩」と呼ばれる詩が多く作られるようになります。その多くは幕末から土族反乱の続い

た明治一〇年ごろまでの作品です。

変革の時代には天下国家を激しく論じ合うものです。その議論にはしばしば世を嘆き己れの人生の悲運さを憤る悲憤慷慨の言が付随しました。激しい議論と慷慨に漢詩のリズムは合っていたのかも知れません。ここではそういった詩を一つ紹介します。新撰組近藤勇の「辞世の詩」です。ただし、幕末から明治前期の漢詩人大沼枕山の添削がかなり入っているようですから近藤勇の自作とは言いにくい面もあるのですが。

摩他今日復何言 他なし今日ま何をか

言わん

取義捨生吾所尊

義を取り生捨つるは吾が尊ぶ所

快受電光三尺劍

快として受けん電光三尺の劍

只將一死報君恩

ただ一死をもつて君恩に報せん

現代語訳は必要ないでしょう。これから死のうというのに「快として受けん電光三尺の劍」とはよくいったものだと思います。強がりというよりもこの時代の精神、空気の表れとみるべきでしょう。

もはや大津皇子の「臨場詩」に書かれた世界は微塵も見られません。近藤勇から見れば千二百年以上前に作られた大津皇子「臨終詩」などは眼中になく、「死しては忠義の鬼となり、極天の皇基を護らん（死しては忠義の鬼となって、天地のある限り皇室の御礎をおまもりしたい）」という藤田東湖の「正気之歌」あたりが念頭にあったのではないのでしょうか。幕

末の武士たちにとって大津皇子はすでに自分とは無縁な遙か古代の人であったのです。

九

以上で大津皇子の「臨終詩」にまつわる話はおしまいなのですが、日本では皇子の詩で立ち消えた「臨終詩」の流れが本家の中国の江南地方では二〇世紀にまで延々と続きました。多くの「臨終詩」「臨刑詩」が作られました。そのほとんどが仮託詩だといわれています。江南の民衆の誰かが刑死した人物に仮託して詩を作り、それが巷間で盛んに歌われ記録されたということであつたらしいのです。そうした詩の中で二〇世紀に作られた詩をあげておきます。

この詩は魯迅の弟である周作人が一九三六年に書いた文章で紹介した作品です。作者は葉德輝。一九二七年にそのあまりにも保守的な言動がたたり革命勢力によって処刑されました。その彼の「絶筆詩」と題された五言絶句は次のようです。

慢插三通鼓 ゆるゆるとうたるは三通鼓

西望夕陽斜 西を望めば夕陽斜めなり

黄泉無客店 黄泉に客店なし

今夜宿誰家 今夜誰の家に宿らん

「三通鼓」とは葬儀や施餓鬼の前にうたれる鼓。禅宗の葬儀などで見られる「チン・ポン・ジャラン」の鼓のこと。現代語訳は必要ないでしょう。

この詩には陳叔宝の「臨行詩」の世界

を支えていた「鼓」「夕陽」「黄泉」「家」などの語が相変わらず使われています。しかし、本当に「絶筆詩」を葉德輝自身書いたかどうか確証はありません。あくまでも伝聞による記録ですから。

犯罪者として刑死した人に対して民衆がどのような感情を持って仮託詩を作ったのかは想像に想像を重ねるしかないのですが、筆者は魯迅の小説「阿Q正伝」の最後の部分に書かれた文章を思い出します。主人公の阿Qが公開で銃殺された後の民衆の言葉です。

多くの者が不満だった。銃殺は首切りほど見てもおもしろくないから。それになんとか間抜けな死刑囚ではないか。あんなに長いあいだ引き回されながら、歌ひとつうたえないなんて。これでは歩き損じゃないか、というのだ。

死刑囚に処刑直前のパフォーマンスを期待する民衆。そして処刑の様子を語り合い、同工異曲の詩とはいえ仮託詩をつくり人々の口から口へと歌い継いでいく民衆。これをどう考えたらよいのやら筆者には大きな課題です。

最後に筆者が忘れることのできぬ「臨刑詩」を一つ、といっても断片ですが、紹介します。

作者の名前は秋瑾。清朝を打倒しようという辛亥革命の最中で刑死した女性革命家です。日本に留学し魯迅とも面識がありました。着物を着て日本髪を結った写真が

残っていますが、きりつとした顔立ちで知的な感じのする女性です。懐には匕首をよく持っていたそうで、これをドンと机に突き立てて「君たちは革命を本当にやる気があるのかい。」とすぐまかれると、さすがの魯迅も思わず引いてしまうほどの気性の激しい人であつたようです。

秋瑾は一九〇七年七月十五日、紹興で斬首刑に処されました。当時、革命家の処刑は公開であるのが多かったのですが、彼女の場合は非公開であつたようです。処刑に際して残した言葉は次の通りです。

秋風秋雨愁殺人 秋風秋雨人を愁殺せしむ
「愁殺」とは「とても愁いを感じる」の意味です。短い句ですから、これだけで秋瑾の真意をつかむのは困難ですが、激しい気性の革命家の最後の言葉としては不可解なほどに感傷的な言葉です。人間こそ矛盾に満ちた最後の謎というわけでもありませんが、学生時代に武田泰淳の「秋風秋雨人を愁殺せしむ」（筑摩叢書）を読んで以来、ずっと心に残っている言葉です。

秋瑾の「臨刑」の言葉には「黄泉」「鼓の音」「家」といった言葉が見えませんが、彼女はもはやそんなものはまったく縁のない所に立っていたのでしよう。

架空の世界を構成している言葉が消滅していけば、当然のことながらその世界も崩壊していくもの。ひよっとしたらですが、冥界の王は威勢のいい女性革命家の出現に周章狼狽して「オレの手に負え

ぬ」と悟って黄泉の国を閉ざして何処かへと逃げだしてしまったのかもしれない。

【補足】

1 「ホーホー虫こい」

本文の中では大津皇子の「臨終詩」は陳叔室に仮託された詩を留学僧が日本に伝え、それを下敷きにして皇子の詩ができたのではないかと述べました。しかし、書き終わって筆者はやはり万に一つの可能性を捨てきれずにいます。つまり、偶然にも似かよった詩ができたのではないかという可能性です。それは次のような事情があるからです。

「ホーホー虫こい あつちの水は苦いぞ こつちの水は甘いぞ」というわらべ歌を御存知の方は多いと思います。もちろん蛍を狩る際に歌われた「わらべ歌」なのですが、これとよく似た歌が中国の各地にかつて伝承していました。「捕蛍歌」と題された歌は次の通りです。

亮火虫、夜夜紅。天上去、雷打你。下地来、火烧你。快来、快来。我保你。「亮火虫」とは蛍のこと。ざっと訳せば次の通りです。

ホタル、夜な夜なあかい。天にあがれば雷がうつぞ。地に下れば火が焼くぞ。早く来い、早く来い。お前を守つてやるぞ。「似ているといえは似ているけど」というのが率直な感想ではないでしょうか。

「ホーホー虫こい」は「日本の詩歌 日本歌謡集 中公文庫 一九七四刊」によれば「秋田に発生し、歌詞を多少異にしたながらも、全国的に歌い広げられたわらべうたである」とのこと。また「亮火虫」

は北京大学にいた周作人らが刊行した雑誌「歌謡」に徐芳という人物によつて一九二二年に報告・掲載された歌です。となれば秋田で生まれた日本のわらべ歌が中国の歌を模倣したとは考えにくく、やはり偶然に似てしまったという以外ないと思うのですが、いかがでしょうか。

ここからすれば大津皇子の詩と陳叔室の詩とがたまたま似かよつてしまつたかもしれぬ、となるのですが、これ以上は筆者にお手上げです。

蛇足ながら、かつて中国古典文学研究者の藤野岩友氏は日中ふたつの「ホタル」の詩は死者の魂を招き寄せる「招魂の詩」であるとし、ゆらゆらと飛ぶホタルは死者の魂の象徴であるとされました。そして、藤野氏は「歌謡」に掲載された多くの「ホタル」の歌を分析・検討を始めて、その結果にもとづいて「巫系文学論」を展開され、中国の古典詩集「楚辞」の理解を一新されました。はるかな昔、友人に勧められて読んだ藤野氏の「巫系文学論」は筆者にとつて懐かしい一冊です。さらに蛇足の上に蛇足ですが、筆者の知人で中国からの留学生Tさんによると彼の出身地である上海では「亮火虫」の歌は聞いたことがないとのこと。新しい中国が発足してすでに七〇年。都会では「招魂」の風俗がもはやすたれたのでしょうか。それともホタルそのものが見かけなくなったのでしょうか。

(2) 大沼枕山のこと

大沼枕山（一八一八〜一八九一）は忘れられた詩人といつてもよい存在にな

っているで、少し述べておきます。枕山は明治初年において森春濤と並ぶ詩の大家でした。明治二十四年に亡くなるときまでマゲを切らず徹底した反明治政府の姿勢を貫いた人として知られています。特に明治二年、時事を風刺した漢詩連作「東京詞三十首」は弾正台から糾問されました。その中から一首。

烟花初番照二州 烟花初番二州を照らす
群公公退倚涼樓 群公公を退きて涼樓に
柳橋名妓多辞召 柳橋の名妓多く召を辞す
別赴風流太守舟 別に赴く風流太守の舟
（両国の川開き、花火の美しさを見ようと、退序とともに官員諸公は次々と隅田川の堤にある樓閣にやってくる。平生よびなれた芸妓を名指したが、召しに応ずる者がいない。今宵は風流人として名高い土州様「山内容堂」のこと。鯨海酔侯と自ら号したの豪遊で皆そちらに行ったとのこと。）

明治政府に出仕して官員となった者たちの風流心も何もなく遊蕩これ競うありさまが活写され、それを「無粋な成り上がり者」とみる江戸市民の冷ややかな視線が見えるようです。ここらあたりが明治新政府の痛にさわつたのかもされません。

反時代的に生きぬいた大沼枕山が明治初年という時代を鮮やかに記録した「東京詞三十首」は木下彪「明治詩史」（岩波文庫 二〇一五年刊）で読むことができます。

明治のこととはいえ反政府的な漢詩が多く載せられ解説もされている本書が発禁にもならず昭和十八年に刊行されたことに驚きますが、古くさい漢詩といえども十分に現代の世情批判をする力のあることを知る上で一読の価値があります。

隠された歴史（2）

満田正賢

隋書倭國伝について

隋書倭國伝（倭國伝）には倭國の天子が「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す恙無きや」という国書を送つたという有名な一文が載っています。隋書倭國伝の抜粋を紹介します。

開皇二十年 倭王姓阿每字多利思北孤號阿輩雞彌遣使詣闕 上令所司訪其風俗 使者言 倭王以天為兄以日為弟 天未明時出聽政脚踏坐 日出便停理務 云委我弟 高祖曰此大無義理 於是訓令改

大業三年 其王多利思北孤遣使朝貢 使者曰聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法 其國書曰 日出處天子致書日没處天子無恙 云云 帝覽之不悅謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞

しかし、日本書紀にはこれに対応する記述がありません。又これは西暦六〇〇年（推古八年）の出来事ですが、推古天皇が女帝であるため通説では一般に「日出づる処の天子」を聖徳太子と考えています。さて、国書の中で「日出づる処の天子」と自称し「阿每多利思北（比）孤」と署名している人物は本当に聖徳太子なのででしょうか。

古田史学ではこの「阿每多利思北（比）」

「孤」は九州（筑紫）王朝の王であるという見方をしています。私は別の見方をしています。私の見方の説明の前に、まず中世（平安時代）には「阿每多利思北（比）孤」を聖徳太子と見做す考え方がなかったということについて「新唐書」と「宋史」の記述をもとに説明したいと思います。

新唐書日本伝について

中国の唐代の正史には旧唐書と新唐書があります。旧唐書は唐に続く五代の時代九四五年に成立し、新唐書が編纂されるまでは単に唐書と呼ばれていました。

新唐書は旧唐書が欠落させていた史実を補う為にずつと後の宋代一〇六〇年に新たに編纂されたものです。

「新唐書」日本伝には近畿王朝が唐に提出したであろう日本の歴史が載っています。そこには注目すべき二つの記述があります。一つは近畿王朝が最初「筑紫城」に居たという記述です。もう一つは歴代天皇の系図の紹介の中にある「次用命亦曰目多利思比孤」という記述です。新唐書では隋書に記された「阿每多利思北（比）孤」について歴代天皇の系図の中の用命であると説明しておりなおかつ「用命亦は目多利思比孤」という不思議な記述をしているのです。新唐書日本伝の全文を紹介します。

其王姓阿每氏 自言初主號天御中主 至彦
瀲 凡三十二世 皆以尊 爲號 居築紫城

彦瀲子神武立 更以天皇爲號 徙治大和
州 次日經躡 次安寧 次懿德 次孝昭 次天安
次孝靈 次孝元 次開化 次崇神 次垂仁
次景行 次成務 次仲哀 仲哀死 以開化會
孫女神功爲王 次應神 次仁德 次履中 次
反正 次允恭 次安康 次雄略 次清寧 次顯
宗 次仁賢 次武烈 次繼體 次安閑 次宣化
次欽明 欽明之十一年 直彥承聖元年 次海
達 『次用明 亦曰目多利思比孤』 直隋開
皇末 始與中國通 次崇峻 崇峻死 欽明之
孫女雄王立 次舒明 次皇極

この「目多利思比孤」の意味を説明する上で、次に「宋史」に触れます。

宋史日本伝と「王年代紀」について

中国の「隋・唐・五代十国」に続く「宋」の時代の歴史を記した「宋史」には日本国の僧（あまのむね）が雍熙元年（九八四年）に「職員今（令）」と「王年代紀」各一卷を宗の朝廷に献上したと記載されています。倉然（ちやうねん）は平安中期の東大寺の僧で、藤原氏の出身であり、帰国後京都嵯峨野に清涼寺を建立しています。そして「王年代紀」の記す所として日本国関連の詳細が記載されています。但し、宋史日本伝の中には一部「王年代紀」とは別に「隋書」「唐書（旧唐書）」「五代史」の記載内容に触れた箇所もあります。「王年代紀」は天御中主に始まり神代の系図を記載した後、神武天皇から今上天皇（円融天皇）まで歴代天皇の名を記載しています。各天皇の記載には関連するエピソードも付記されており、用

明天皇には「子有り、聖徳太子という」という記載が続き、聖徳太子に関するエピソードが紹介されています。しかし、聖徳太子のエピソードの中にも用命天皇に関する記述の中にも「阿每多利思北（比）孤」に触れた記述はありません。

宋史日本伝において「多利思比孤」の記載が出てくるのは、「王年代紀」による日本の各地方の記述が終り、「皆倉然の記す所と云う」という文章の次の段落です。次の段落ではいったん「王年代紀」から離れて「隋書」「唐書（旧唐書）」「五代史」の記載内容に触れています。文面は次の通りです。

按隋開皇二十年、倭王姓阿每、名目多利思比孤、使致遣書……

宋史日本伝には新唐書日本伝の記述を参考にした痕跡は見られません。新唐書日本伝の記述を参考にしたならば「次用命亦曰目多利思比孤」という記述について触れざるをえないからです。宋史は元代一三四五年に成立していますが、宋代一〇六〇年に成立した新唐書に触れていない理由は、宋史日本伝の原案となった文書が九八四年に献上された「王年代紀」の紹介文のような形ですでに宋代に存在していたからであると思われる。

宋史日本伝と新唐書日本伝の天皇名の誤字の比較

新唐書日本伝には、明らかに「王年代紀」の歴代天皇の記述を引用した痕跡が

見られます。しかし、天皇の名前には誤字と思われる記述があります。一方、宋史日本伝にも誤字と思われる記述が見られます。歴代天皇の名前に諱が遣われている例を除いて、明らかに誤字と思われる天皇名を次に列挙します。（新唐書に記載された光孝天皇までの歴代天皇名の中で抽出しました）

*宋史日本伝に見られる天皇名の誤記

- ①孝天皇↓孝安天皇
- ②安閑天皇↓安閑天皇
- ③孝明天皇↓孝謙天皇
- ④持統天皇↓持統天皇
- ⑤天炊天皇↓大炊天皇（淳仁天皇の諱）

*新唐書日本伝に見られる天皇名の誤記

- ①天安天皇↓孝安天皇
- ②海達天皇↓敏達天皇
- ③雄古天皇↓推古天皇
- ④総持天皇↓持統天皇
- ⑤孝明天皇↓孝謙天皇
- ⑥浮和天皇↓淳和天皇

注目すべきは、孝謙天皇と持統天皇に関する誤記です。孝謙天皇の場合は両者共通して孝明天皇と誤記しています。本物の孝明天皇は明治天皇の父であり、天皇名の順番から考えると、ここには孝謙天皇が入らなければなりません。「王年代紀」は日本で作られて宋の朝廷に献上されたものであり、「王年代紀」の原本にこのような誤記があったとは考えられません。共通した誤記の理由として「王年代紀」の原本を書写した第二史料があり、それを宋史と新唐書が共通して引用

したということが推測できません。

又、持統天皇に関しては、宋史が持統天皇と誤記し、新唐書は総持天皇と誤記しています。第二史料が持統天皇と誤記し、新唐書がそれを更に誤記したことが推測されます。この誤記によって存在が推測される第二史料こそが、『王年代紀』の紹介文のような形で宋代に存在していた宋史日本伝の原案となる文書だったのではないのでしょうか。

新唐書の「用命亦曰目多利思比孤」について宋史日本伝の編者は、『王年代紀』による「万世一系」の歴代天皇の記述と、それとは異なる隋書倭国伝の「阿每多利思比孤」の記述を別にして記載しています。一方、新唐書の編者は、天皇の系図と隋書の「阿每多利思比孤」を無理やり結合させた可能性が強いと思われます。その為、倭王たる「阿每多利思比孤」はどの天皇にあたるかという問いに答える必要があったものと思われる。

想像するに当時宋に滞在していた日本人にその答えを求めたのではないのでしょうか。「王年代紀」を献上した日本国の僧奄然(あまね)は藤原氏の出身であると宋史日本伝に記載されており、当然近畿王朝の人間です。新唐書が編纂された一〇〇〇年頃には、すでに日本国内において歴史の改ざん作業は終了しており隋書倭国伝に記載された「阿每多利思比孤」の真実を知るものはいなかったと思われる。通

説となっている「阿每多利思比孤」聖徳太子」という発想は当時の近畿王朝にはなかったと推測されます。

ちなみに当時すでに成立していた元興寺縁起には法興寺(飛鳥寺)元興寺の前身)にあった丈六仏の光背銘「丈六光銘」の文章が書写として残っており、そこには「大隋国使主裴世清」が法興寺を訪問したと記されています。又法興寺は本来蘇我馬子が建立した蘇我氏の氏寺なのですが、元興寺縁起には法興寺は用明天皇が推古天皇と聖徳太子に(我が国には尼寺はあるが、法師寺がないので)法師寺を建てる場所を探すように命じたところから始まると記載されています。奄然または他の日本人留学僧が知りうる知識の中で無理やり引き出した結論が、「大隋国使主裴世清が訪問した」という元興寺縁起の文面を総合的に解釈すると、隋に日本国の国書を送った倭王「阿每多利思比孤」は用明天皇ではないか」というものだったのではないのでしょうか。

隋書、新唐書、宋史の文面の比較

「阿每多利思比孤」に該当する箇所を隋書、新唐書、宋史の文面を比較します。

①隋書「開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤」

②新唐書「其王姓阿每氏、自言初號天御中主」……「次用命亦曰目多利思比孤」

③宋史「按隋開皇二十年、倭王姓阿每名自多利思比孤、使致遣書」

この三つの文面を比較すると、宋史の文面は隋書の文面をそのまま引用しようとしたものだとわかります。しかし二箇所が変化しています。第一に「多利思比孤」の「北」が「比」に変化しています。第二に「字」が「名目」に変化しています。「北」が「比」に変化していることについて、新唐書の文面も「比」になっていることから、そもそも隋書には「比孤」と書いてあったのではないかという考察が成り立ちます。しかし、新唐書の編者が直接隋書の原本を引用したのではなく「王年代紀」の紹介文のような形で宋代に存在していた宋史日本伝の原案というべき文書を引用したと考えるならば、「北」を「比」に変えたのはこの第二史料であり、隋書の原本はあくまで「阿每多利思比孤」であつたという解釈が可能になります。

第二の変化、「字」から「名目」への変化については、宋史の編者が「字」(あざな)を「名目」(自の名前)という違う表現に変えたのではないのでしょうか。全体の文脈からみて、これは隋書の引用であり、同じ意味を表現しているとした解釈できないからです。

*旧唐書倭国伝日本伝・宋史日本伝・元史日本伝(岩波新書・石原道博訳)

では「自は衍(エン||余計な字)か?」という注釈を付けています。

新唐書が天皇の系図と隋書の「阿每多利思比孤」を無理やり結合させたもので

あると考えると、「目多利思比孤」という記述は全く意味不明なものです。しかし、「王年代紀」の原本を書写した第二史料があり、それを宋史日本伝と新唐書日本伝が共通して引用したと考えると一つの解釈が可能になります。

すなわち第二史料に記載された「目多利思比孤」の「自」を「目」と誤記したという解釈です。

今までの考察をまとめると次のようになります。

①新唐書日本伝は「王年代紀」の紹介文のような形で宋代に存在していた宋史日本伝の原案というべき文書を引用したものである。

②しかし、新唐書の編者は、天皇の系図と隋書の「阿每多利思比孤」を無理やり結合させた。その結果として「次用命亦曰目多利思比孤」という仮想の記述を挿入せざるをえなくなった。

③「目多利思比孤」という記述は宋史日本伝の原案と思われる文書に記載された「目多利思比孤」という記述を引用したものであり、更に「目」を「目」に誤記したものである。

日本国の僧奄然が宋にきた雍熙元年(九八四年)の時点では、隋書の「阿每多利思比孤」は誰なのか、それを意図的に隠したのではなく、京都(近畿王朝)にはそれを知る人が全くいなかったのです。

見えない人 (2)

古城 悠

◆からっぽ◆

それから数週間、いや数ヶ月の間、要は折あるごとに転移を試みた。本当にあれの再現ができるのだろうか。仮にうまくいったら今度は誰になっているのだろうか。もしも恣意的に転移ができるテクニクがマスターできたら……などの思いに胸を躍らせながら、床に落ちてはいるパチンコ玉をいわくありげに拾い上げてはひよいと前方に視線を送ってみたり、それっぽいショーウィンドウが目にとまると前でもじっとおのが顔を凝視したり。たまには自宅のベッドで「知らない、天井」とつぶやいたりもした。だが、いずれのケースでも、不思議な感覚は発生しなかったし、望む結果はもたらされなかった。そのうち、かの現象が起きていた時に感じていたリアルさもぼんやりしたものととなり、もしかすると気の所為だったのかもと思うようにもなった。

「気の所為」とは便利な言葉だ。仕事で不都合が生じた場合「山田の所為で」「田中の所為で」というふうに責任の所在を明らかにさせようとする。誰の判断に誤りがあったのか、どこに対応に遅滞があったのか、状況を細かく分けて検討することでトラブルに至った直接間接の原因も浮かび上がる。同じトラブルを繰り返さないためにも大切な手続きだ。しかしそれと同じやり方で「気の所為」を持ち出すと話はややこしくなる。責任を押しつけられる「気」なるものが曖昧模糊としているからだ。具体的な事象に対してその確からし

さを問う時に「気の所為」が出てくると、まず確からしさはゼロパーセントの全否定となるし、それだけでなく確かでないものを確からしく言った責任を問う相手もいなくなる。つまり、誰も責任を取りたがらない案件は、誰の所為でもなく「気の所為だ」と片付けてしまふのである。現実問題で人命に関わる重大事故が起きていたり何百万何千万もの金銭が泡となっていたりすると、「気の所為じゃ済まない」ともなるが、責任をどやかく言う必要もない、すなわちどうでも良い問題だと宣言できる時には気の所為にしておいて、すべてが解決したことにするのである。

そんなこんなで四谷氏のこと猫氏のことも忘れていた頃、突然、かつての経験が蘇ってきた。朝、ベッドの上で目が覚めた時に何か違うなと感じたのが始まりだった。座りの悪い感覚は、それだけであれと同じことが起きるなど直感的に思えたのだが、先の時がそうだったような、ねっとり感やムズムズ感といった皮膚で捉えられる感触は伝わってこない。どちらかと言えば内側からこみ上げてくる感覚である。動悸めいたもの？、肉体的なところへ戻すのなら息苦しさというのが最も近いのだが、それでも何か違う。次に認識できたのは、ぼつかりと抜け落ちた空虚感と言えはいいのだろうか、鼻から吸い込んだ空気が喉や肺に入らずにいきなり身体中に広がる感覚……といったもそんな事態は未だかつて経験したことがないので、もし仮に身体がそういう構造に変えられたとすればこんな感じ方になるんじゃないかなという想像なのだが、そういう空虚感だ。最初は何か違うと思った、続いて息苦しくなった、その後で空

虚感が襲ってきたといったような真合点。起き上がった時計を確認する。いつもより三十分くらい早めに目が覚めたようだが問題は無い。こんな時もあるで片付く程度だ。髭を剃りながら鏡を見るも、映し出されているのは自分自身の顔であって、見知らぬ誰かの顔、況してや猫や犬のそれと変わっているわけではない。簡単な朝食を済ませてマンションを出る。駅まで自転車漕ぐ。駐輪場に預けて改札に向かう。通勤フッシュの人混みに苦悶する。タイムカードを押して出社の記録をつける。机に向かい業務日誌を開く。ルーチンは滞りなくこなせていて行動そのものは何も変わっていないのだが、やはり、何かが違うという感覚は消えない。

あたりをぐるりと見回しても、遅刻や欠勤は見当たらず、始業時のいつもの風景だ。何が違うのかはわからないのだが、確かに何かが違う。無理に違いを探し始めると、山田が素つ気ない態度に感じられることぐらいは引つかからないわけではない。席についた時も、隣なんだから軽い会釈ぐらいはあつていいのに、今日は何の反応もない。業務日誌に一生懸命何かを書き付けているところを見ると、急を要するトラブルに頭が一杯になっているのだろうか。

「コーヒーでいいですか」

少し席を空けてふたたび戻ってきた時、後輩の田中が山田の傍らに立って訊いていた。毎朝、営業一課七名の顔ぶれが出揃うと、一番若年の田中がリクエストを尋ねてまわることになっている。お茶くみ業務と言くと古めかしい会社の風習だが、別に強いられているわけでもなく田中がそれを行っている。チー

ムリーダーの鈴木課長も黙認している。そのため、業務日誌の確認がそれで行う最初のルーチンになっているように、田中のリクエスト集めはチームのルーチンであるかのように思われているのである。

「お、よろしく」

日誌への書き付けを続けながら山田が答えている。山田と田中の間に割り込むのちようどいいタイミングだったので、要は「俺のも頼むわ」と重ねた。しかしその声を聞か聞かないかのうちに田中はきびすを返す。ちようどいいと思ったのは要だけで、田中の方は要は不在と判断したようだ。気分次第でコーヒーになったり日本茶になったりする山田と違って、要の場合はいつもコーヒーの一杯なので、あるいは尋ねるには及ばないと見做されたのかも知れない。だが、たとえそうだったとしても、田中と要の間に生じたずれば、何かいびつな空気を感させた。

「あれ、昨日、嫌われることしたっけ？」

見ようによっては、山田にはリクエストを聞きに来たが要のは聞くつもりがないとも言っているように受け取れたので、要はそんなことも考える。それでも深くは気にせず、在庫データはこれで、最新版がこつちでうんたらかんたらと独り言をつぶやきながら通常の業務を始めた。ところが、次に田中がやって来た時、事態は急展開する。

「どうぞ」といって田中が差し出したのは山田のコーヒーだけだった。

「おいおい、俺はシカトか」と冗談半分で田中に語りかけたのだが、その言葉が終わらないうちに、事態が飲み込めてきた。田中だけでなく、山田にも、要の声が聞こえていない

らしい。声ばかりか姿も見えていない雰囲気なのである。朝から感じていた違和感の正体はこれだったか。

予め示し合わせた無視でないのは、二人の挙動がきわめて自然に行われているところからわかる。意図的な無視なら態度の隅々に意図が滲み出る。だからこそ無視される側には無視する側の意図が伝わり、子どもたちの間での意地悪やイジメとして成り立つ。それに対して百パーセントで気づかないのなら、気配はまったく伝わらないし、それはもう無視とか言っている次元ではなくなる。

「なあ、山田あ、昨日言ってた渡辺商事の値引き要求だけど、あれなやつぱり通りそうにな……」

努めて平生通りの声を保ちつつ、隣席の山田に向かって仕事の件で話しかけてみた。自分の声は自分の耳には普通に聞こえるが、山田からはわずかばかりの反応も返ってこない。予想していた通りだが、声は途中から尻すばみに弱々しくなっていく。

掌に視線を落としてみた。五本の指、両手で十本の指がついている二つの掌は確かに見えている。白く透き通って見えるとか先端の方が薄くなっているとかは、ない。閉じたり開いたりを繰り返してみても、意図した通りに指は動いている。異常なところは、やはり何もない。昔の詩人が手を見たのは貧しさゆえのことだったそうだが、要が自らの手を見ているのは、自分がこの世界に存在していることを確認するためである。パン、パン、と大きな音が響くように手を拍つてみたり、ギョツと頬をつねつてみたりすると、つねられた頬はヒリヒリとした疼きを残し、掌はほん

のりと赤く腫れ上がる。しかし要のそうした挙動を咎める者は、いない。「透明人間になっちったか」

「独り言が漏れる。そして、あいかわらず業務日誌と格闘を続けている山田の姿を眺めていた。五秒、十秒、二十秒、何を考えるわけでもなく山田の姿を眺めていると、あることに気づいた。」

「声が聞こえないや姿が見えないはさておき俺がいなくてことを、なにスルーしてんだよ、遅刻とか無断欠勤とか、疑えよな」

わざと声に出したのは、そうでもしないと自身の存在が自分でも疑わしくなるからである。

「そうだよな、大変なことなんだぞ、チームの中にずる休みしてるヤツがいるんだぞ」

要は、声に出して部署内を一周二周と歩き回った。ことさらにつくつく山田に語りかけたのは、単に山田が隣の席だったからなのだが、他の社員のところでも後ろから語りかけてみた。鈴木課長に対しては、真つ正面からそう言ってみた。始業のタイミングで他の社員が何をしているか見て廻るなんて、やったこともないし、やる必要も感じなかった。それをいま思わぬ形でやる羽目になっているわけだが、あらためて緩い環境だと思ふ。就業規則が言うところの始業時間は軽く過ぎていくが、接客応対のようにシャッターが開いて一斉に「いらっしやいませ」と始まる職種でないためか、新聞を読みながらお茶を啜り、他と談笑するなど、まだエンジンが掛かりきらない者もいる。だが誰も要がいけないことに気を留めている気配はない。

影かたちを保っていた時の自分自身を振り返ってみると、どうだろう。営業一課の誰かが始業時に来ていなかったとすれば、どうするだろう。新聞を読みながらお茶を啜るついでに山田に「今日、岡本はどうしたんだ？」とかの具合に語りかけるだろうか。そうするかも知れないが、しないかも知れない。それでも七人いる全員が全員、とりわけ隣の山田までがスルーしたままというのは、理解に苦しむところだ。

ふと、壁のスケジュールボードの目が留まる。鈴木課長以下、それぞれが自主申告で本日の予定を記すようになっていく。野田要の欄自体がなかった。

なるほど、そういうことか。声に出す出さないは内容によって決めるわけではないが、この閃きは咄嗟の声が出ないくらいに衝撃的だった。室内の徘徊をやめて自分の席に戻って考えを整理する。そういうことか、最初から存在していないことになっているわけか。

でももしそういうふうな世界が書き換えられたのだとしたら、こういう形で存在を自覚している俺は何者なんだってことにならないか？、そもそも、ここでこういう自覚があると言つても何をどう感じているんだ？、それ以前に誰がそうしているんだ？……收拾のつかない問いが、次から次へと生まれてきて頭の中を駆け巡る。これは、もう透明人間どころの騒ぎではない。

慌てて机の前の業務日誌を手にとつて、昨日、自分で書き込んだページを開いた。日付の下には覚えのある内容が、覚えのある字体で記されている。だが担当者名の欄には何も書かれていない。文責署名必須の記述なのに、それが無い。にもかかわらず、鈴木課長によ

るチェック済みの判が押されている。二日前、三日前にさかのぼってみてもすべて同じだ。誰がその報告を書いたかなど関係なく、機械的にチェック済みとなっている。記憶の中ではそうはなっていないはずだ。鈴木課長のチェックがいくらか疎かとしても、ここまでのルーズは許されるはずがない。

喉の奥から何かなま暖かいものがせり上がってくる。それを意図的に飲み込むと、ゴクリと音が鳴ったように聞こえる。野田要は確かにここにいて、その要自身は認識している。なのに野田要は「存在していない」ことになっている。スケジュールボードにしても、業務日誌にしても、要の名前が書かれていていかるべき箇所は、すべて空白になっているのである。

「さて、どうしたものだろうね」

かつて『吾輩は猫である』の主人公になった時のような言葉が漏れた。悠然としておいて構わない事象でないのは明らかなのだが、思考がついていかない時はおのずとこうなってしまうようだ。こういうのを達観というのだろうか、それとも諦観だっけ。達観と諦観か、何となく字が似ているな。漱石は悟りの境地を「則天去私」という言葉で表現したというが、あれつて自己中心的なこだわりの一切を切捨て去つてということなんだから、諦めの境地といえるんじゃないかな、だとすれば物事を達観するのは諦めることが第一歩になるわけで、だから達観と諦観は似ているんだろうな。

要は、油性のマジックペンを取つて業務日誌の表紙に大きく「達観」と「諦観」という文字を並べて書いてみた。ゴンベンとシン二

ヨウ、旁も違う。これらが全く別の字であることを改めて確認して「どうでもいいか」とつぶやいた。それから自分を嘲笑するかのようになり、ふっと笑みを浮かべた。

「自分だけがいない世界か」

声を出してみたが、具体的にそれがどういうものなのか想像するのは難しかった。少なくとも野田要という名前のあるべきところがすべて空欄になっているのは理解した。要を要と認識していた人たちの意識からその存在が消えているのも経験的にイメージできる。ではそれで世の中はどう動いているのだろうか。世界規模でのキーパーソンでないにしても、営業の担当先とか、影響を受ける人たちはいる。この連中だつて、良い悪いはともかく、何らかの影響は被っているはずだ。風桶の定理を持ち出すなら、ちっぽけなものでも存在を消し去ってしまったら別の思わぬ影響が發生する。名前や存在をなかつたことにするだけで終わる話ではない。

取引先からの問い合わせなのか、それとも絨毯爆撃的営業なのかは知らないが、外部からの電話も数本入り、周囲はようやく動き出した営業一課らしくなってきた。いつもなら要も電話対応なり書類整理なりをやつていて、風景の一部に加わっているに違いない。だがしかし存在が無くなっているいまは、目の前のものが大型スクリーンに映し出された風景にしか感じられない。4Kか8Kか知らないが、どれだけ精細に表現されたところで、彼我の境界は越えられない。一次元二次元の尺度を精密にすれば視覚が捉える映像は実物に近づく。よく言われる時間尺度の四次元がどういうものかは知らない。だが、それとも

違ふ彼我の隔たりを数値化する尺度みたいなものが、さらに別にあるのだろうか。だから目の前で動いているのが山田であれ、田中であれ、鈴木課長であれ、もはや生身の人間らしさは伝わってこない。人間っぽい動きをしているの何かなのだ。

「核戦争の後に生き残つた最後の一人つて、こんな感覚になるのかな、はは」

声を出して言つてみたものの、われながらつまらないことを言つたものと寂しくなる。その手のディスプレイ映画なら、主人公が創意工夫でサバイバルを続けているうちに、別の生存者と遭遇することが、大人の都合によつて保証されているのだから安心できる。「それに比べると、他から認識されないことが確定している俺にはどんな救いがあるんだ、なあーんてね、なにメタ発言で遊んでるんだよ」くだらないとわかつていても、声を出し続けないと本当に消えてしまふそうぞうで怖い。「怖い、か……何か怖いんだろ、もうすでに消えているんだから、消えてしまふそうに感じる」と自体、矛盾しているだけだな

要は、先ほどのものに似た嘲笑を浮かべた。その笑みが嘲笑であることを認知する第三者はいないが、自らの感覚ではおのれ自身を嘲っている笑いとなっている。そして「こんな下卑た笑い方も板についたものだ」とつぶやき、椅子から立ち上がつて営業課の部屋を出た。自分を認識する人間がいけないことは頭ではわかっているつもりなのだが、それでもディスプレイ映画のように、どこかで思わぬ遭遇があるのじゃないかと考えたのである。

「おはようございます、二課の野田です」

営業一課のドアを開けて二気よく声を掛け

てみた。接客を前提にしてカウンターを備えている構造ではないので、普通なら近くにいる誰かが対応に立つはずである。二課の場合、ドアが一番近い机が田中なので、田中もしくはその隣の岡本が対応することになっている。一課のドアを開ける時には、それまでのことが悪夢であつて、別の部屋に入るといふもの当たり前の日常が展開されるかもとの期待がなかったわけではない。しかし実際には反応はどこからも起きない。ドアが一番近いのは今年入社で大きな胸が印象的な女の子なのだが、彼女は何かのデータを入力していて、こちらに視線を向けることもしない。他の人たちからも返つてくるものは何もない。二課の部屋と同じで、ここでも要の姿は見えておらず、声は聞こえていないようだった。やはり全世界レベルで存在が抹消されているのだろうか。

一課を出て、一階エントランスに降りてみる。総受付のカウンター前を通つても、案内は視線を挙げない。表に出たから改めて入り直してみる。自動ドアが開くのに顔を向けてくれることはない。やはり見えていないのだらう。四階にある社長室に上がつてみる。秘書室を抜けて社長室のドアを開けると、社長はまだ出社していないのか、人の気配はない。それでも秘書室を通り抜ける時点で見答められることがなかったのだから、他同様に姿も声も認知されていないのは明らかだった。もう一度、一階に降りて社屋を出る。近くの自販機で缶コーヒーを買い、正面玄関の真ん前に腰を下ろして缶のプルタブを引き上げる。パチンという音に弾かれたように、一つの考

えが閃いた。(続)

編集後記

九八歳で亡くなれば大往生である。誰もがホツとし何がしかの肩の荷を下ろす。私も重たい肩の荷が消えた思いがする。次男坊であるから兄の苦勞とは比べものにはならないが、それでも兄嫁の手前ずいぶん気を使つてきた。

百歳が珍しくない昨今、高齢者の介護は、昔より負担が大きいに思える。確かに、介護施設をはじめ老人を取り巻く環境は非常に改善したのだが、昔に比べ介護の時間が長くなり費用もかきみ負担も大きい。介護保険は、その負担を少しでも改善しようとするものだ。

寝たきり老人の問題を解決する方法の一つに、安楽死がある。本人が死にたいと強く希望し家族も同意すれば安楽死を認めればいいのではないが、また、食べられなくなれば、無理な延命治療はせず自然死を待てばいい。

しかし、八三歳の義母が脳梗塞で倒れ肺炎を起こし食べられなくなった時、私と家内は、胃ろうもやむなし、このまま死なすことは出来ないと決めた。元気な人が急に食べられなくなり生死を分ける状態に置かれた時の判断は難しい。

母なら覚悟を決めて何もしないかもしれないが、家内の母だから判断が鈍る。実の母と義理の母とは違ふ。責任が取れない、自分が非情になれないものがある。

運よく胃ろうもせずに回復したからよかったが、もしあのままの状態が続けば、延命治療をお願いしたと思う。

やはり、人の生死を軽々しく論じることは出来ない重くて深い問題であると思った。



わたしはせんそうをしらない

日本弁護士連合会(日弁連)の日本国憲法企画「憲法を詩おうコンテスト」があった。「古希」を超え、なお平和と人々の自由、人権を支え続けている日本国憲法。その理念・役割を評価し、大切さを謳う(憲法詩(ポエム))を募集』するといふものであった。今年の五月から九月にかけて小学生以下の部から、中学生・高校生の部、大学生・社会人の部まで三九〇作品の応募があり、十月末、その中から大賞に茨城県の小学一年生の作品が選ばれた。「わたしはせんそうをしらない」、という言葉で始まる次の詩である(以上のことについて詳細は、日弁連のホームページを参照されたい)。

尾池ひかり

わたしはせんそうをしらない。
 おかあさんもしらない。
 おばあちゃんもしらない。
 でも、ひいおばあちゃんはいっ
 ている。
 えきでへいたいさんをおくった
 かえり、ひこうきがとんできて
 「きじゅうそうしや」でやられ
 そうになったって。

はしってはしってはしって
 ようやくにげたって。

ひいおばあちゃんがいききたから
 おばあちゃんがうまれ、
 おかあさんがうまれ、
 そしてわたしがうまれた
 へいわをまもるけんぼう
 いのちをつなぐけんぼう
 わたしがおおきくなっても
 このままのけんぼうであること
 それがわたしのねがい

日ごろは水中に身を潜めている
 私にも世の中の動きはそれとなく
 伝わってくる。それにしても、近頃
 では日本国憲法を蛇蝎のごとく嫌
 い、これを変えようとする安倍政権
 の動きは耳障りなほどであった。そ
 んなときである。「…へいわをまも
 るけんぼう いのちをつなぐけん
 ぼう わたしがおおきくなっても
 このままのけんぼうであること
 それがわたしのねがい」という小さ
 な声が私に届いた。
 大学を出て、政治家になり、おま
 けに二度までも首相になった偉い
 人より、一年生のこの子はどんなに
 命の大切さを知っていることだろ
 う、と思った。憲法は、平和や暮ら
 しや個人の尊厳に深くかかわる。憲

法というものは個人の命に関わる
 のだ。山椒魚だって考えるー。

憲法を変えれば人の世は変わる
 変えるべきでないものを、ゆめ変え
 るべきではない。

「君たちはどう生きるか」と日本
 国憲法われらに真っ直ぐに問う
 戦せぬ心とかたち九条に足すも
 のはなく引くものもない

それにしても、人里離れた水の中
 にじつと目を閉じていても、今日の
 課題は、憲法を変えることではなく、
 日本という国がその志からどんな
 に遠いところに来てしまったかに
 思いを致すことだろうと思う。問題
 の本質は変えることではない。精神
 の実現である。

「思えば遠くへ来たもんだ」
 それでは困ることもある
 ぶくぶくぶく ……



俳句

土田 裕

短日やくじの売り場へ長き列
 冷まじや年どし縮む我が背丈
 講釈の多き揉め事十二月
 ワイン飲む我ら異教徒クリスマス
 賑わひに遠き真昼の熊手市

影山 武司

マフラーの巻き方同じ夫婦かな
 身体ごと甘えくる子や小六月
 「見て、見て」と
 子の呼ぶ声や冬ぬくし
 冬眠の森の梢の入り日かな
 寒橋の音引き返す町境
 凍星の落つる音かと耳澄ます
 独りの夜冬満月の影を踏む
 冬耕のひとりの鍬を振るひをり
 角円き墓石ひとつ散紅葉
 根を一に冬青空へ子宝杉